佐渡を世界遺産に

世界遺産登録に向けて

西三川砂金山(1) ―『今昔物語集』と佐渡―

今から1000年ほど前に書かれた『今昔物語集』という31巻の説話集があります。その巻第26の第15話に、佐渡で砂金が採れる話が載っています。

その内容は、次のようなものです。

能登国の砂鉄掘りの長(おさ)が、佐渡ほど金の採れる所はないと話しているのを、能登の国守(こくしゅ)が聞きつけて、その真偽を問うたところ、小さな舟と食料を要求して、長は佐渡へ渡って行った。

1か月余りが経って、国守も忘れかけたころ、長が佐渡から帰ってきた。国守が人払いをして会うと、長は布切れに包んだ砂金を国守に差し出した。

その後、長はにわかにいなくなったため、国守は東西に尋ねたが、とうとう行方がわからなかった。おそらく長は砂金のあり場所を問われると思い、姿を消してしまったのだろうと人々は疑った。

長の持ってきた砂金は千両もあったといわれている。このため能登の人々は、佐渡に行って砂金を掘るべしと語り合ったという。かの長もその後、砂金を掘りに佐渡に行ったのであろう。

『今昔物語集』のほか、13世紀前半に書かれた『宇治拾遺物語』にも同様の話があり、佐渡で砂金を採った場所は、いずれも西三川であるといわれています。

◆市役所世界遺産推進課（金井就業改善センター内）☎63―5136

能登の砂鉄掘り衆が砂金を採ったとされる西三川河口

佐渡ジオパーク

ジオパーク、推進日記 41

☆俳句とジオパーク

「沢根すがも会」は、月に1回、会員が集って俳句を詠んでいます。この日の席題は「ジオパーク」。会員たちは、最初に推進室の学芸員から佐渡の成立ちについて話を聞いたり、会場近くにある沢根の崖まで足を運んで見学したりして、ジオパークについて学びました。青空の下、沢根崖の周りを、時折、桜の花びらが舞う俳句日和の中、会員たちは遠くからその情緒ある風景を眺めたり、現場に触れたりしながら、どんな句を詠もうか構想を広げていました。

見学を終え会場に戻ると、現地での情景を思い浮かべながら俳句作りに取り掛かります。1人が2句から3句の句を詠み、紙に書き出していきます。全員の句が出揃うと、投票によって席題賞を決め、この日は次の2句が選ばれました。

「花ちるや化石の貝にちさき穴」

この句に詠まれている化石の貝の穴は、他の貝が食べた跡です。沢根崖は、大昔の海にたまった砂や泥でできており、そこで過ごしていた貝の化石の中には、穴があいている貝が見つかることもあります。

「指で知る地層の冷えや春愁い」

この句を詠んだ会員は、実際に触れた地層がひんやりしていたのでしょう。あるいは、触れた地層から80万年前の気が遠くなるような大昔の佐渡の海底を指先で感じ取ったのかもしれません。

この2作品のほかにも、事前の学習と崖の見学で発見したことを詠んだ作品が多くみられました。一見、つながることのないと思われる俳句とジオパークが見事に重なって、会員たちも満足していました。皆さんも自分の趣味や日々取り組んでいる事とジオパークを繋げてみて、楽しみの幅を広げたり、新たな魅力を発見してみてはいかがでしょうか。

◆教育委員会社会教育課 ジオパーク推進室(佐渡博物館内) ☎52―2447